ブレーメンの町楽隊

グリム兄弟
楠山正雄訳

主人もちのろばがありました。もうなが年、こんきよく、おもたい袋をせなかにのせて、粉ひき所（じょ）へかよっていました。さて、年をとって、だんだんからだがいうことをきかなくなり、さすがにこのうえ追いつかうのがむりだとわかると、主人は、ここらでろばのかいぶちをやめたものか、と考えだしました。ところで、ろばは、さっそくに、こりゃ、ろくなことではないとさとって、逃（に）げだして、ブレーメンの町をめあてに、とことこ出かけました。そこへ行ったら、町の楽隊（がくたい）にやとってもらえようという胸算用（むなざんよう）でした。

しばらくあるくうちに、往来（おうらい）に一ぴき、りょう犬が、

だるそうにころがって、口ばかりあけて、はっは、はっは、あえいでいるのに出あいました。それはさんざん野山をかけあるいて、へとへとになっているというようすでした。

「おい、すたこら大将、なにをあっぷ、あっぷいっている。」と、ろばは声をかけました。

「いやはや、きいてくれ、こういうわけだ。」と、犬はいいました。「なにしろ年はとる、いくじがなくなる、おいらもむかしのげんきで猟場(りょうば)をかけあるくわけにはいかない。主人は、それならいっそ、たたき殺してしまえということになった。あわてて逃げだしたという

わけだが、さて、この先どうしてパンにありつくか、じつはかんがえているところだよ。」

「ところで話だが、おいら、これからブレーメンの町へ出かけて、町の楽隊にやとってもらおうとおもうんだ、どうだ、おめえ、いっしょに行って、いちばん、音楽でめしをくう気はないか。おいらリュウトをひくから、おめえ、カンカラ太鼓（だいこ）をたたくがいい。」

りょう犬は、うん、よかろうというので、いっしょに出かけました。

それからあまり行かないうちに、ねこが一ぴき、往来にすわりこんだまま、それこそ三日も雨をくったよ

うな顔をしていました。

「やあ、どうしたい、床屋（とこや）の親方、どうやらおひげの手入どころではないという顔つきだが。」と、ろばはいいました。

「いのちとかえがけというところだ。けいきのいい顔をしてもいられまい。なにしろ年をとって来てね、歯はばくばくになる、ねずみのやつをおいまわすよりか、ろばたで香箱（こばこ）つくって、ごろにゃん、ごろにゃん、のどをならしていたくなるさ。そこで、主人のかみさんが、いっそ水にはめておしまいよといいだした。そうされないうちに、とびだしては来たが、さていい思案（しあん）

はないしさ、いったいどこへどう行ったものかと、あぐねているのだよ。」と、ねこはいいました。

「おれたちとなかまで、ブレーメンの町へ行けよ。おまえさんは、夜の音楽ならお手のものだろう、町の楽隊につかってもらえるぜ。」と、ろばはいいました。

　ねこは、さっそくさんせいして、いっしょに出かけました。

　やがて、三人組の脱走者（だっそうしゃ）は、とある屋敷（やしき）内に来かかりました。門の上に、その家のおんどりがのっていて、ありったけの声をふりしぼって、さけび立てていました。

「おい、骨のしんまで、じいんとくるような声を出すなあ。どうかしたのかい。」

と、ろばはいいました。

「なあに、あしたはいいお天気ですよって、知らせてやっているところだよ。」と、おんどりはいいました。

「なにしろ、けっこうなお聖母（せいぼ）さまの日だ、おちいさいキリストさまの下着の、おせんたくして、ほしなすった日だ。ところが、そのあしたの日曜日（にちようび）に、お客があるというんで、ここのおかみさんが、なさけ知らずにもほどがあらあ、女中の話だがね、それで、あすはおいらをスープにしてたべっちまうってんでね、こん晩、

さっそく、首をチョン切れといいつかったとよ。だから、せめて声のだせるうちとおもって、おいら、のどのやぶれるほどわめき立てているんだよ。」

「やれやれ、なんということだい、赤ずきん、おれたちといっしょに行くがいいよ。ブレーメンの町へ出かけるところだ。ころされて死ぬくらいなら、すこしは気のきいた所が、どこへ行ったってあろうじゃないか。おめえはいい声しているから、なかまになって音楽をながしてあるけ、いっぱしかせげるぞ。」と、ろばはいいました。

この申し出は、しごくおんどりの気に入りました。

そこで、こんどは四人つれだって出かけることになりました。

二

ところで、ブレーメンまでは、なかなか一日では行けません。そのうち日がくれたので、森の中へはいって、そこでひとばんあかすことにしました。

まず、ろばと犬とは、一本の木の下にごろりと横になりました。ねことおんどりとは、木の枝の上にやすみました。ところで、おんどりはわざわざこずえの先

まで行ってとまりましたが、これが、いちばんの安全な場所であったのです。さてねようとするまえ、このおんどりはもういちど、東西南北、風のふく方角がどこかとながめまわしたとき、ふと、むこうに、ちらちら火らしいものがみえたので、なかまに声をかけて、どうしても、そうとおくないところに家があって、あかりがついているらしいといってしらせました。

ろばが、そこで、

「じゃあおれたち、ここをひきはらって、もっと先まで行ってみようや。どうもこの宿は上等（じょうとう）とはいかないから。」と、いいますと、犬もそこへ行ったら、骨の

一、二本、ことによると肉の香（かおり）ぐらいかげようかとおもって、さっそくさんせいしました。

こういうしだいで、四人組は、そのあかりのさしている方角（ほうがく）にむかって、出かけました。するうち、あかりはずんずんはっきりしてきて、ぱあっとてりだしたとおもうと、そこはどろぼうの家で、中にはこうこうと灯（ひ）がともっていました。

ろばは、なかまでいちばんのせいたかのっぽなので、窓のところまで行って、中をのぞいてみました。

「親方、なにかあったかね。」と、おんどりはたずねました。

「どうして、あったかどころのさわぎじゃないぞ。」と、ろばはこたえました。「ちゃんとテーブルごしらえがしてあって、けっこうなごちそうと、のみものが、山となならんでいるよ。どろぼうども、てんでに、はちきれそうな顔で、よろしくやってるところさ。」

「そいつをものにしようじゃないか。」と、おんどりはいいました。

「うん、うん、どうしたってわりこまなきゃあな。」と、ろばはいいました。

そこで、まず、どろぼうどもを追っぱらうには、どうすればいいかと、四人組の動物は、相談(そうだん)をはじめま

したが、やがていいくふうがみつかりました。

ろばは、前足を窓にのせることになりました。犬は、ろばのせなかにとびあがることにしました。ねこは犬のせなかによじのぼることにしました。おしまいに、おんどりが、ばさばさととびあがって、ねこの頭の上にのっかりました。いよいよしたくができあがると、一、二、三のあいずで、四にん組はいっせいに、音楽をやりだしました。ろばはひひんとわめきました。犬はわんわんほえたてました。ねこはにゃおんとなきました。おんどりはこけこっこうと、ときをつくりました。とたんに、まどをつきやぶって、一同へやの中へ

とびこみました、がらん、がらん、がらん、音をたててガラスはこわれました。

どろぼうどもは、びっくりぎょうてん、きゃあとさけび声をあげてとびあがりました。たいへんな怪物がとびこんで来た、そうとよりしか考えません。もうすっかりおびえきって、てんでに、あたまをかかえて、そとの森の中へ、にげだして行きました。

そこで、四人組は、ゆうゆうテーブルにつきました。ごちそうは、のこりものでも、がまんすることにして、それでも、これからあと四週間ぐらい断食してもいいというきおいで、つめこめるだけ、たらふくつめこ

みました。

三

さて、四人組の楽隊なかまは、おなかができると、あかりをけして、めいめいのうまれつきとすきずきにまかせて、いいぐあいの寝床(ねどこ)をさがして休みました。ろばはそとのつみごえの上にねました。犬は戸のかげにねました。ねこはへっついの上で、灰のぬくみをさがしてねました。おんどりは、とまり木のかわりに、屋根うらのはりの上にのりました。なにしろ、みんな

遠道をして来て、くたびれていましたから、もうさっそくに、ぐっすりねつきました。

真夜中をすぎたときに、どろぼうどもが、とおくからみますと、うちの中にはあかりがともっていず、中はひっそりかんと、しずまりかえっているようでした。

「どうもおれたち、おどかされて、にげだしたといわれちゃあ、がまんできないぞ。」

おかしらはこういって、ひとり手下にいいつけて、ようすをみせにやりました。

さて、いいつかった手下がはいってみると、家の中はどこもひっそりしていました。そこであかりをつけ

てみようとおもって、台所へ行きました。すると、やみに光っているねこの目だまを炭火（すみび）とまちがえて、いきなりマッチをつっこみました。ところが、ねこのほうは、おやすいご用とうけてはくれず、ううう、とたけりながら、顔にとびついて、めったらやたらに引っかきました。

いやはや、おどろいたのなんの、手下のどろぼうは、したたかにやられて、びっくり、はいもう、うらの戸口から逃げだそうとしますと、そこにねていた犬が、とびあがって、むこうずねにかみつきました。そこで、庭へかけだして、つみごえのそばをかけぬけようとし

ますと、ろばがあと足でしたたかに、けとばしました。すると、このさわぎで目をさまさせられためんどりが、はりの上から、はしゃぎきって、ひと声、キケリッキー、とどなりました。

　どろぼうは、いのちからがら、足にまかせてにげだして、おかしらの所へかえりました。そうしてこういいました。

「どうもはや、たいへん、あの家には、すごい魔物(まもの)がはいりこんでいて、いきなり、きみわるく、ふうう、と息をふっかけて、ながい指で顔をひっかきました。それから、戸の前にはひとり、男が待ちぶせていて、

小刀をすねにつきたてました。庭へ出ると、なんともえたいの知れない、まっ黒なばけものが立っていて、こんぼうをふっるて、したたかなぐりつけました。その上、たかい所には、ちゃんと裁判官(さいばんかん)がひかえていまして、さあ、そのわるもの、ここへつれて来い、とどなりました。いやもう、さんざんのていたらくで、まっくらさんぼう逃げて来ました。」

それからは、どろぼうどもも、こりて、二どとふたたび、この家にはいろうとはしませんでした。ところで、ブレーメンの楽隊なかま四人組も、ひどく、ここが気に入ったので、それなりもうよそへ出て行こうと

はしませんでした。

さて、これまで申したことは、ついこないだ、それこそ湯気(ゆげ)の立つほやほやの口からきいたお話ですよ。

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店
１９４９（昭和24）年２月20日初版発行
１９４９（昭和24）年12月30日４版発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。
入力：大久保ゆう
校正：浅原庸子
２００４年６月16日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。